
幻獣の館 ～死の愛鳥～

玖琉 時斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻獣の館 ～死の愛鳥～

【Nコード】

N9812F

【作者名】

玖琉 時斗

【あらすじ】

突然変異で黒白の翼を持って生れ落ちた墮天使、フェリス「ハーヴェリー」デイヴァイン。一族に蔑まれる中、唯一愛してくれた母に旅立てと言われ、やがてフェリスは一つの洋館に辿り着く。それが一生を共にする仲間との出会いだった。死神に続く、幻獣の館シリーズ・第二段！「今日だけ貴女の為に、泣かせて下さい」

FILE 1：異端なる生誕

一人の天使は子を身籠った。

愛する人との間に出来た念願の子。

もうその人はいないけれど、だからこそ嬉しさは一入だった。

天使はいつも自分の腹に語りかけていた。

元気に産まれてきてね、と。

しかし十月十日経っても

そのまた一ヶ月経っても

産まれてくる気配はまるでなかった。

それでも彼女は待ち続けた。

きっと人より少し遅いだけ。

もうすぐ元気な産声を上げてくれる。

そう信じて疑わなかった。

まだ見ぬ可愛い子。

愛する人との最後の繋がり。

早く産まれてきてね。

そう語りかけ続けた。

誰もがもう死んでいると

ただの肉塊になっているのだと

そう言う中で彼女だけは信じていた。

四季が四週を廻った頃。

その時は訪れた。

ついに待望の子が産まれたのだ。

彼女はその子供を抱き寄せた。

だが、その子を見た瞬間、彼女は驚愕に目を見開いた。

まるで信じられない”モノ”をみたように。

それもそのはずだ。

新たに誕生したその天使には

漆黒の片翼が生えていたのだから・・・。

FILE 1：異端なる生誕（後書き）

『幻獣の館〜死の愛鳥〜』連載開始しました。

これはタイトルで分かった方もいらっしゃると思いますが、「幻獣の館〜屍の館〜」の続編です。

主人公は違うのですが、最後に少しでも関わりを持ちますので宣言しておきます。

家族愛と絆を書いた全9話のシリーズとなっております。
宜しければ、お付き合い下さいませ！

FILE 2：フェリス（前書き）

第二話での主人公は18歳。

異端者ゆえ、軽く虐めの表現が出てきます。

FILE 2：フェリス

MS XXXX年、冬季。

一人の天使が異端なる子をこの世に産み落とした。

その子供は片翼だけが漆黒で、生まれた時も産声をあげない赤子だった。

天使と天使の間から産まれたのに、理由のわからぬ突然変異の出来事。

悪魔の持つ特有のそれに、人々は畏怖した。

誰もが口々に殺せと唱えた。

しかし母親は決してその子供を手放さなかった。

彼女は子供の決して明るくない将来を見越し、少しでも楽になるようにと願いを込めて名付けた。

『聖なる心の導標』という意味合いを含めて、

フェリスと…。

色とりどりの花が咲き誇り、地を華やかに染める。

大層美しいそれは、人々が足を止めるほどだ。

緩やかな風が緩く編み込んだ髪を撫で、気持ちよくさせてくれる。

だが、聞こえてくるのはその場にそぐわぬモノばかりだった。

「悪魔だ！悪魔がきたぞ！」

「いつまでいるつもりだ！さっさと出て行け！！」

「お前がいるだけで気分が悪いわ。天使の面汚し…！」

罵倒が構うことなく飛び交う。

そんな言葉が降り掛かるのはいつものことだ。

今やその言葉はエスカレートし、死ねという言葉も使われる。

ついには石やモノが投げられる。

町を横切る度にこの様だ。

だがこれは幼い時からのことで、もう慣れた。

皆が恐れていることも、自分が異質である事も全て理解していた。

だが、それ故に言い返したり、やり返したりという事はしない。

彼らもこうすること以外、僕の扱い方がわからないのだ。

それに、たとえ抵抗したとしても、この人数では敵わない。

何せ此方はたった一人なのだから。

最初は辛かったが、この世に生まれてから十六年。

今なら何をされても耐えられる。

たった一人の理解者がいてくれるから…。

歩みを止めて振り返ると、彼らの動きも止まった。

息を呑む声が聞こえる。

そんなに怖いなら近付かなければいいのに、とも思う。

僕は彼らの言動と、自分の思いに苦笑した。

その笑いに畏怖と怪訝そうな視線が集まる。

僕は表情を変えて、薄く微笑んだ。

「すみませんが…。僕はまだ死ねませんし、出て行きません。此処にはまだ僕にとって大切な人がいますから…」

そう、大切な人が。

彼らは僕の行動に驚愕の目を向け、固まっていた。
それを無視し、一礼するとまた歩き始めた。

その日はもう罵倒もモノも飛んでくる事はなかった。

FILE 2：フェリス（後書き）

第二話の主人公は、推定18歳。

主人公出てきたので、人物紹介致します。

名前：フェリス「ハーヴェリー」ディヴァイン

歳：0→21 / 種族：天使族 / 性別：男

髪：空色 / 瞳：蒼 / 身長：182

突然変異で天使から産まれた墮天使。

片や純白の翼、片や漆黒の蝙蝠羽を持つ。

名の意味は古代オルフェニス語で「聖なる心の道標」

悪魔を連想させる漆黒の片翼から、同族に忌み嫌われる。

唯一の生活の望みで、自分を愛してくれたのは母のみ。

実は長つたらしい名前な奴です；

こんな奴でも気に入って下されば幸いです。

FILE 3：幸福の為の嘘（前書き）

第三話から過去編となります。

主人公フェリスが3歳の時の話です。

FILE 3：幸福の為の嘘

僕は産まれた時から言葉が理解できた。

ただ舌足らずの口で話すことは出来ない。

成長過程の上でそれは当然のこと。

でも僕にはそんな当然のことが、殆ど当て嵌まらなかった。

思考力に至っては、既に大人並みであると自負できるほどだった。

それを知らずに大人達は僕を目の前で声を張り上げていた。

口々に殺せ、捨てる。と…。

僕はただただずっと静かに耳を傾けていた。

だから母さんが同族の人達に蔑まれている事も、僕を殺すか捨てるかするようにせがまれていた事も、全て僕が生まれてきてしまった事が原因なのだと知っていた。

三歳になった時、初めて鏡に姿を映せた。

自分の姿を見て、僕はすぐに納得してしまった。

ああ。だから皆は畏怖していたのだと。

鏡に映るのは一族特有の純白の翼ではなく、悪魔のような漆黒の翼だったから。

片翼だけとはいえ、白と黒では黒の方が際立って見えた。

今まで母さんは僕を鏡の前へやらなかった。

外へも生まれてから一度も出たことがない。

自分が知っているのは、窓から切り取られた世界だけ。

実際、今だって隙をみて、鏡を盗み見ているのだ。

「優しいな、母さんは…。僕を捨てれば済むのに…」

そうすれば苦しまなくて済むのに。

僕は鏡に手を付いて、ぼそりと一人呟いた。

鏡に映る自分の顔は、心なしか寂しそうに目が揺らぐ。

それは自分ではない別人だと思える表情で少し驚いた。

普段はどんな時でも笑っている。

母さんが笑うから。

それに伴って僕も笑う。

時々無理に笑う母さんが痛々しくて、辛さを忘れるように、馬鹿の

一つ覚えのように毎日笑みを向けていた。

きつと毎日苦言を言われてるに違いない。

自分のせいだと判っていたから、少しでも忘れるように。

そう願いを込めての笑みを……。

僕は必死に顔を戻して、自分自身に満面の笑みを向けた。

どうして母さんは僕を捨てなかったのだろうか。

どうして殺さなかったのだろうか。

そんな疑問が毎日絶えない。

鏡に布を元通りに被せ、椅子に深く腰掛ける。

僕は目を閉じて、先ほど見た自分の姿を思い起こしていた。

そうしていると玄関のドアが開き、母さんが帰ってきた。

笑顔で「おかえり」と言うと、「ただいま」と笑顔が返ってくる。

どんな目に遭っても、母さんは僕を手放さない。

胸に抱き寄せ、本当に大切に接してくれる。

暖かく優しい微笑を向けながら、頭を撫でる。

そうされる事が僕は大好きで、暫しその余韻に浸っていた。

今は母さんが笑っているのならそれでいい。

そう思い、僕は鏡を見たという事実を隠した。

これは今の関係を崩したくないと願う、自分の我儘だ。
でも、長きの疑問が頭から消え失せることはなかった。

FILE 4：偽りの崩壊（前書き）

三話に引き続き、過去編。

ここでの主人公フェリスは13歳となります。

FILE 4：偽りの崩壊

疑問を打ち明けることが出来ないまま、また年月が過ぎた。もう鏡で自分の姿を見てから十年経ち、僕は十三歳になっていた。時を見ていたとはいえ、長く引き摺り過ぎて逆に聞き難い。何故、こんなにも引き摺ってしまったのだろうか。

母さんが可哀想だから？

悲しむ顔を見たくないから？

そう考えたが、今一ピンとこない。

始めはそう思っていたはずだった。

母さんが笑顔でいてくれるのならそれで良いと。だが、今は…。

その時、僕は一つの仮説に行き着いた。

矛盾のないその完璧な答えに僕は吐き気がした。他の誰にでもなく、自分自身に。

「怖がつてる…だけじゃないか」

そう僕は怖いんだ。

母にその真意を聞くことが…。

自分が望んでいた答えと違っていたらどうしよう。嫌われていたらどうしよう。

本当は僕のこと邪魔だと思っていたら…。

考えにはキリがなかった。

僕はただ単に逃げていただけだ。

自分が傷つきたくない、というその一心で。

卑怯で、醜くて、自己中で。

僕は自分が最低な人だとその心に吐き気がしたのだ。

「もう止めよう…」

自分を庇護するのは…。

たとえ嫌われていても、ここまで育ててくれた事は感謝している。外に出されても、一人で生きていける知識はある。

こんなに良くしてもらえて、もう十分ではないか。これ以上、此処に居座つても迷惑に決まっている。何を迷うことがあるというのだろうか。

もう選択肢は一つしかないというのに…。

心は自問自答をして、既に決まっていた。

今日こそ真意を確かめて、母さんのいう通りにしよう。

僕は扉の前まで移動して一度立ち止まった。

これで今日までの生活が全てが終わるだろう。

既に好かれているとは思っていない。

自分がどれだけ苦しめてきた存在か解っているから。

十三ならそれが解つても、この疑問を浮かべてもおかしくはない。

今まではより気味悪がられるからと、何も知らない無垢な子供のフリをして隠し通してきたのだ。

またこれから少しだけその演技をする。

恐らく最後になるであろう演技を…。

僕は自分の思考に忍び笑った。

またどうでも良いことを考えていると。

決心とは裏腹に、どうやら奥底では先送りにしたいようだ。

僕はそれを打ち切るようにドアノブを握った。

「さあ、行こう…」

自分にそう言い聞かせて、ノブを捻る。
僕はゆっくりと運命の扉を開いた。

「あら、まだ起きてたの？」

扉の向こうには編み物をしている母さんがいた。

僕に気が付いて、微笑みかけてくる。

それは毎夜見かける母の姿。

編んでいるその手は傷だらけで、痛々しい。

その手は家事で付いたものではない。

僕のせいで仲間に付けられた絶えることのない傷跡だ。

いつまでも黙って立っている僕を不思議に思ったのか、母さんは近くの椅子を引き寄せて、僕を手招いた。

僕は傍に寄りはしたものの、座ることはなかった。

この方がすぐに出て行けるから…。

「どうしたの？何か怖い夢でも見た？」

そう優しく問いかけてくる声に名残惜しさを感じつつも、僕は何回か間誤付いて、ゆっくりと口を開いた。

「何で…捨てなかったの？」

「何のこと？何か頼まれてたかしら？」

そう言いながらも手の内の作業は止めず、最後の始末に入る。
解っていない母に違うと首を振った。

「どうして僕を殺さなかったの？」

そう言つて漸く母の目が驚きに見開かれた。
驚くのも当然だろう。

今まで姿を見たことも、言葉を理解していた事も、不安要素となることは言つていなかったのだから。

「なん…で、そんなこと…」

やつと発せられた母の声は、喉に詰まるように掠れていた。
次に“これ”を言つた更に驚くだろうか。

いや、嫌悪を向けて怒り出すかもしれない。
何故もつと早く言わなかったのかと。

早く言えば捨てる理由が出来たのにと。

僕は自分の考えに苦笑した。

自嘲的に笑つた僕を信じられないような目で見返してくる。

「僕、自分の姿の事知つてるよ。鏡を見たから」

母の顔に更なる驚愕が浮かび、次いで蒼褪めていく。

僕はそれを見ながら話を進めた。

一度話し出すと出し渋っていたそれは、堰を切るように溢れ出た。

「三歳の時かな。母さんが居ない時に見たんだ。自分が嫌われてい
ることは生まれた時から声も聞こえてたし、理解してた。ただ話す
能力がなかっただけ。だから姿を見た時納得したよ。これが皆が怖
がつてる理由かつて…」

自分はこんなにも饒舌だっただろうか。

可笑しくない言葉が続く。

母は声も出せずに、ただ僕の言葉を聞いている。

僕は今まで自分というものまで隠してきていたようだ。

言葉の数々にその事が今日になってやっとわかった。ずっと押し込んできた言葉は止まることはなかった。続けると共に母の顔は次第に険しくなっていく。

ほら、やっぱり邪魔だったんだ。

僕が居なければ平和な日常が送れていたのだから…。

本当は殺したかった？

捨てると呪われそうで怖かった？

それとも、僕が可哀想だった？

でもそれはただの偽善。

自分で言いながらも言葉がしつくり来ない。

自分を母に置き換えて、一番言いたい事は…。

ああ、そうだ…。

「産まなければ…、良かった…？」

その言葉と共に室内に渴いた音が響いた。

FILE 5：涙の絆

一瞬一体何が起こったのか理解できなかった。

次第に熱を持つて、じわじわと痛みが染み渡っていく。

暫らくして漸く頬が叩かれたのだと気付いた。

僕は叩かれた場所を押さえて、泣くのではなく薄く微笑んだ。

いや、顔は泣きそうなものであったかもしれない。

でも自分で客観視できるはずもなく、笑っている事しか解らない。

きつと長年の月日を無駄に僕へと費やしてきた疎ましい気持ちは、

これくらいでは治まらないだろう。

僕は次の打撃を避けようとせず、ただ俯いて待った。

しかし、いつまで経ってもその時は訪れなかった。

彼女の足元を見つめていると、ぽたりと何かが落ちて、床に敷かれ

た絨毯に薄く小さな染みを作った。

それは不規則に落ちては、また染みをつくる。

僕は一体何かと顔を上げて、すぐにそれが何であったのか解った。

「かあ…さん…？」

僕は思ってもいなかったことに驚いて、目を見開いた。

目の前の彼女は泣いていたのだ。

目を手で覆うこともせず、ただ声を押し殺して透明な涙を流す。

様々な感情が入り混じったような表情で…。

「そ…んなこと…！言わな…いで…！」

嗚咽を抑えながら、彼女はやつとのことで言葉を紡いだ。

僕はまだ困惑していて、何も返せない。

彼女が泣いたところなど見たことがなかった。

僕に対してはずっと笑顔を絶やさない人で、街で何をされても泣くことはなかった。

それだけに動揺は激しく、彼女が歩み寄っても僕は一步も動くことが出来なかった。

彼女は僕の前まで来ると、そつと僕を抱き締めた。

その行為はとても優しく、暖かくて…。

僕に対しての侮蔑や憤りは感じられなかった。

「貴方は母さんの愛した父さんとの…大切な子なの」

母さんは未だ震える声で、静かに口を開いた。

僕は振り払うことも出来ず、か細い声にただ耳を傾けた。

「病気で死んだ父さんとの念願の子。たった一つの大切な命よ」

「大…切？」

「そつよ。産まなければ良かった…なんて思ったことはないわ」

父さんは僕が生まれる前に病死していた。

それは聞いていたが、そんなに好きであった人の子であるなら、奇異な存在で産まれてしまった僕は疎ましいのではないかと思う。

自分自身異物だと解してしまうと、なかなか言葉が信用できなかった。

「それにね。母さんは貴方が生まれて来てくれた事を感謝してるの」

「どうして？僕は皆と違うのに…」

そつ、貴方にも。

そして貴方の愛した人とも。

同じなのは空色の髪と、純白な片翼だけ。

僕には悪魔の羽が付いているから。

なのに彼女は首を横に振り、僕の考えを否定した。

「貴方は人と片翼が少し違うだけ……。あとは何も変わらないじゃない」

ただそれだけの違いなのだと彼女は言う。

そして抱き締める力を強め、言葉を継いだ。

「嫌な事を言われれば傷つくし、怪我をすれば血も出る……そうでしょう?」

その言葉は、難なく心に染み渡った。

それは何回も自分に言っていたこと。

何かを言われるのは仕方ないのだと頭の隅で思いながらも、その実、翼以外の何処が違うのだと言い返していた。

本当は「たった一言」を言っただけで欲しかったのかもしれない。期待する事は出来ないけれど……。

誰か僕にそれを言っただけで安心させて欲しいと。

「貴方は人間よ。フェリス……」

ふいに放たれたその言葉に僕は身を固まらせた。

一瞬我が耳を疑った。

そんな偶然があるわけがない。

だが彼女は僕を抱き締めたまま繰り返した。

“貴方は人間（天使）よ”と。

それを聞いた瞬間、熱いものが込み上げてきた。視界が歪み、僕はいつの間にか涙を流していた。

僕が人であるというその一言を、どんなに今まで望んでいただろう。違うのは羽だけなのに、誰もが外見だけを見て決め付けて、決して内面を見ようとはしなかった。

「フェリスの意味はね、古代オルフェニス語で“聖なる心の道標”っていう意味なの。貴方に明るい未来への道が訪れるように、清らかな心でいられるように、そう願いを込めて名付けたの」

彼女はそこまで言うのと抱擁を解いて、僕を真っ直ぐに見た。そして、あのいつもの暖かな柔らかい微笑みを浮かべた。

「産まれてきてくれて有難う。願い通りの人の気持ちを感じやる、優しい子に育ってくれて有難う。貴方のような子を持てて、母さんは幸せよ」

そう言うと、御免ね。痛かったでしょう？と僕の頬を優しく撫でた。その行為でそれまで一線引いていた糸がぷつりと切れた。

僕は彼女に抱き付いて、初めて大声で泣いた。

信じて甘えてしまっても良いのだろうか。

そう思いながらも僕は心身ともに決断していた。

有難うと御免ねを繰り返しながら、僕の頭を優しく撫でている。

そんな”母さん”と共にこれからも生きていこう。

僕が母さんを守っていこうと。

FILE 6：最愛者との別れ（前書き）

この第6話から、18歳の頃に戻ります。

FILE 6：最愛者との別れ

あの日から五年の月日が経った。

母に真意を聞いてからは、時が経つのが速く感じられるようになった。

抑えていた気持ちが晴れたからかもしれない。

毎日が本当に楽しくて、本当の笑顔を見せられるようになっていった。

誰に何を言われようと母さえ居てくれればそれで良かった。

今では母が僕にとって、命よりも大切な人。

だが三年前から母は病気に掛かり、容態が思わしくなくなった。

今はろくに動くことも儘ならず、ほぼ寝たきり状態だ。

現在、今まで母が出てくれていた分、僕が外に出て食料を集めている。

自分に職が貰えるはずもなく、自然の恵みを採ることしか出来ない。それでも二人分には十分過ぎるほどの食物だった。

外で何と罵られようが、もう僕は気にならなかった。

それは笑って返せる程に。

人間変わるものだと思い、僕は家路を歩きながら一人微笑んだ。

家の前に辿り着き、見上げる。

景色も環境も家も何一つ変わっていない。

変わったのは自分の心と気持ちだ。

僕はお帰り、と掛かるいつもの母の声を思いつつ扉を開いた。

「ただいま、母さん」

いつものように帰宅を知らせる声を掛けて中に入る。

しかし、返事は返ってこない。

寝ているのかと寝室へと足を踏み入れた。

「母さん？寝てるの？」

そう言いつつ歩み寄ると、母さんの瞼が薄く開かれた。
しかしそれ以上開かれる事はなく、僕を探し見た。

そんな母さんは何処か弱々しい。

今にも消え入りそうな、存在が薄くなっているように感じる。
妙な頭に焦燥感が過ぎり、心臓が早鐘を打った。

「フェリス…いつも有難う……」

「っどうしたの？急に…」

声までもが弱々しく、紡がれた言葉に息を呑む。

時が止まったかのようにその瞬間が流れているように感じた。

「迷惑かけて…御免ね……？」

「何が迷惑？僕は母さんがいるから頑張れるんだよ」

迷惑を掛けられたなんて一度も思ったことがない。

逆に掛けている方だと思う。

そう言つと母は首を横に振った。

「これからは新しく踏み出さなきゃ駄目よ…。母さんに囚われ…ないで…。聖なる心の道標。その名の通りに…思うように…、道を…突き進んで…」

「母…さん？」

僕は思いにも依らなかった言葉に瞠目した。

こんなことを言い出すなんて、嫌な予感しかない。

差し出された手を祈るように握り締める。

先を予期してか、自然と視界が歪む。

そんな僕を見て、母さんは微笑んだ。

「優しいフェリス…。でもこれから…笑って…生きて……。きっと貴方の居場所がある…。広い世界の断片しか…貴方はまだ知らないんだもの……」

笑ってと言われても、涙が止まることはなかった。

ただ声も出さず、頷くことしか出来なかった。

ああ、これで最後なのだと判ってしまったから余計に…。

「貴方を認めて…くれる人が…絶対に…いるわ……」

「いる、かなあ…」

「ええ…絶対……」

母の言葉が途切れ途切れになっていく。

僕は言葉の一つ一つを心に刻み付けた。

フェリスと名を呼ばれ、真っ直ぐに見返す。

すると一等大好きな暖かい笑みが其処にあった。

「今まで有難う…。大好きよ……フェリス…」

その言葉を最後に母は全身の力を無くした。

何度呼びかけても、もう動くことはなかった。

僕は母の身体を起こし、優しく抱き締めた。

「御免…。もう泣かないから…。今日だけ…」

貴方の為に、泣かせて下さい。

僕は声を出さずに、涙を流し続けた。

様々な思い出が頭を走馬灯のように駆け巡る。

今日までとても楽しかった。

お礼を言うのはこっちの方だ。

本当に今まで有難う…。

僕も貴方が大好きでした。

そして…

サヨウナラ。

貴方が幸福な転生を迎えることを祈って…。

A - m e n ……。

FILE 7：誓いの旅立ち

母がこの世を去った次の日。

見送るかのように晴天に恵まれ、僕は一人母の埋葬をした。

静かな…けれども景色の良い小高い丘に。

僕は墓前で手を合わせて、約束通りに微笑んだ。

此処はよく母と共に来た誰も知らない自分達だけの秘密の場所。思い出がたくさん詰まったこの場所が一番良いだろうと考えた。

誰にも荒らされる事なく、静かに成仏できるはずだ。

僕は十字を切って立ち上がった。

「じゃあね…母さん」

それだけを口にして、僕は背を向けて足を踏み出した。

もう暫らく此処へ来ることはしないだろう。

母を忘れることなどは決してない。

ただ、それでも約束だけは守りたいから…。

自分を受け入れてくれる人と出会え、真実自分の居場所が見付かったその時は…再び此処に訪れよう。

貴女に幸せを伝える為に。

世界を周り、それを見つけることが約束の一つ。

そして、もう一つは…。

「ふ、フェリス!？」

一人の同族が僕に気付き、たじろいで一步下がる。

その声を聞きつけて、多くの民が集まってきた。

怖いのなら出て来なければいいというのに。

それでも妙な所で仲間意識の強い天使族は、集結して僕に眼を向け

た。

此処まで集まったのは、場所が悪かったのもある。何といっても、今居るのは何年も遠ざけて来た天使の街。こつなる事は予測できていた。それでも理由があつての行動だった。

「何をしにきた？」

「少々御挨拶に。僕はもう此処から去りますので、ご安心下さい」

僕はそう言つて、軽く礼をとつた。

その言動に辺りはざわついた。

「何故、今頃？」

「もう此処に大切な人は…、母は居ませんから…」

そう言つと、ざわめきはより一層大きく広がつた。

奇声を発する者もいたが、僕には気にならなかつた。

「お前が…殺したのか？」

そんな言葉がポツリと呟かれ、一気に静まり返る。だがそれを切つ掛けに、罵声が上がつた。

「やはり悪魔だ！よくしてくれた母親を殺すなど！」

「愛を死をもつて返すなんて…！」

「死神め！お前が死ねばいいものを…！」

そんな声が口々に掛かる。

僕は冷静にそれを受け止めていた。

此処へ来たのは、もう一つの約束を始める為。

罵声も気にせず、否定もしなかった。

確かに自分は死神なのかもしれないという思いがあった。

殺したのは間接的にであれ、自分だったのではないかと。

病気の原因が、過労や精神への負担があったかもしれない。

僕を守って生きていく事はそれだけ大変であっただろうから。

それが分かっている…

「僕が殺した…そう思って頂いても結構です」

凜とそう言い放つと、場が静まり返る。

僕は続いて一族を見渡し、微笑みを向けた。

「ですが、死ぬわけにはいきません。僕にはまだやらなくてはならない、母との大切な約束がありますので」

その言葉を最後に僕は初めて翼を大きく広げ、大空に飛び立った。

左右音の違う翼を羽ばたかせて、空気を切る。

今まで知らなかったが、顔に強くあたる風が気持ち良い。

一族から放たれたはずの罵倒の言葉は、羽音で一切聞こえなかった。

もう一つの約束。それは…

「もう二度と涙は見せない…」

何を言われようと、何をされようと。

これからは笑って生きよう。

最後に貴女の前で笑顔を見せられなかった分も…。

僕は定期的に翼を羽ばたかせた。

行く宛などありはしない。

ただこの広い世界を見る為に。

そして、自分を受け入れるような変わり者を見つける為に。

一人、未だ見知らぬアナタを探そう…。

僕は一人、これからの事を想像して笑みを浮かべた。

その笑みは不思議と気持ちを楽にさせた。

何日、何ヶ月、何年とそれは変わらずに。

辛い時も。

悲しい時も。

ずっと。

FILE 8：赤眼の悪魔

母国を飛び立つてから、三年。

僕は未だに世界を見て廻っている。

母国という箱庭から出て見た世界はとても広大で。

何処も彼処もが違う文化を作り出していた。

天使自体受け入れられない場所もあったし、母国と同じように畏怖の眼で見る処もあった。

何箇所か何も言わない処はあったが、それは僕自身を誰も目に留めておらず、どうでも良いと思われているだけだった。

自分の定着できる居場所なんてあるはずがないと思いつつも、心の何処かでその希望を捨て切れずに、僕は探し続けた。

母との約束、という事を気持ちに上乘せして…。

空を移動していて、ふと僕は白い靄が掛かっている事に気付いた。

「…？これは……」

初めは雲の中に入ってしまったかと思っていたが、それは広範囲で晴れるばかりか徐々に濃くなっていくことから霧だと判明した。

霧は文献でしか読んだ事がなく、実際に遭うのは初めてだ。

先が見えないのに飛ぶのは困難となり、僕は仕方なしに地上へ降りた。

地上も上空とさして変わらなかったが、木々がある分、道が鮮明に判った。

それらの木を頼りに、触れながら作られた道に行くことにする。

じっとしては抜け出せない。

足を進めて行くと、次第に霧が薄くなってきた。

どうやら抜け出せそうだと思っていると、今まで道に行く助けとなっていた木がなくなり、拓けた場所へ出た。

空は霧掛かっているのに、道だけがはっきりと見えて気味が悪い。その先へと視線を延ばして、僕は驚愕した。

「すごい……」

思わず感嘆の声を洩らす。

視線の先には一つの大きく立派な屋敷が奥に聳え立っていた。上から見ていた時は、その霧の濃さで気付かなかったようだ。どうしてこんな処に建てられているのかは判らない。

だが唯一、其処にはもう誰も住んでいないだろうと思われた。屋敷自体に損傷はないが、自分の来た道を普通には来れないだろう。本当はすぐにでもその場所を離れたかったが、身体が吸い寄せられるかのように足は屋敷へと向かっていった。屋敷に行けと何かが僕に訴えている。

「ただの客とは珍しい……。ようこそ辺境の地へ」

「……っ！？……人？」

屋敷の前まで来た時、屋敷の方から突如声が掛けられた。声は歳若い男のもの。男は重く閉ざされていた門を開けた。出てきたのは黒髪に黒服、黒マントという全てを黒で包み込んだ、自分と同じかそれより少し若いかと言った風体の青年だった。ただ瞳だけがルビーのように真赤で白肌と黒に際立って見えた。それが彼の第一印象だった。

突然目の前に現れた青年。

前髪で隠された右顔には、包帯も巻かれているのが見える。驚いている僕を見て、彼は口元に笑みを浮かべた。

「此処に常人はまず来ない。此処の噂を知らなかったのか？」

「噂…？」

「この屋敷の名は“屍の館”。赤眼の悪魔が住まう場所…」

そう言つて男は、白い手袋をはめた手で自分を指さした。

悪魔…と僕は反芻して呟いた。とてもそうは見えない。

そう思っていると顔に出ていたのか男はくつくつと笑い出した。

「お前みたいな反応は初めてだ。まあ、俺は本来人間だったがな」

「人間つて…、ならば何故悪魔だなんて嘘を…」

「嘘ではない。人は皆、俺の事を赤眼の悪魔と呼ぶ。この眼を見て人は俺の一族を畏怖し、此処へと追い遣った。何回も危機を回避したからというのもあるがな」

僕は青年の言葉に驚いて、眼を見開いた。

この人は自分と全く同じではないか。

漆黒の片翼だけで畏怖されて一族から追い遣られ、悪魔と呼ばれた自分と…。

「まあ、今は真実人外だから別に構わんが。俺は一族に伝わる禁呪を使って、不老不死の身体になったからな。もう立派な化け物だ」

意に介した風もなく、男はあっさりとそう言い放った。

どうしてそんな話を僕に…？

そう聞くと門に背を預け、男は何かを企むように口元だけで笑った。

「さあな。俺にも判らん。ただ…お前が俺と似た眼をしてるからか」

「似てる…？」

眉根を寄せて、訝しみながら尋ねると、男は口に薄い笑みを乗せた。そして指をついと上げて、僕を指差した。

「その漆黒の片翼。人は畏怖するだろう。お前も追放者ではないのか？」

言い当てられて、ああ、やはり彼は自分と同じなのだと理解した。自分と同じ異端者なのだ。

FILE 9：聖なる心の道標

そこでふと彼の言に気になるところが出てきた。
彼は禁呪を使つて不老不死だと言わなかっただろうか。

「あの…お聞きしても宜しいでしょうか？」

「何だ？」

「貴方は何故、延命の禁呪を？」

そこまでされて死んだというのに、何故生きる道を選んだのだろうか。

自分なら落とした命を繋ぐ事はしない。

漸く全てから開放されるのだから。

自分を不幸だとは思っていないが、無理に生き永らえたいようなものではない。

そう考えていると、男は口に笑みを携えたままで静かに語り出した。

「死なんてものは個人の観念だ。本人が良しと思えば、生きるも死ぬも自由。ただ俺は普通の死に方をしてはいない。十九の時、自分の執事に殺されたんだ」

「…っ！殺された？では…生を望んだのは復讐ですか？」

「否、自分の身体を使つた実験だ」

実験という単語に僕は怪訝な眼差しを向けた。

「俺はこの屋敷の中しか知らない。その生活がつまらなくてな。俺が生きている事を知った執事がどんな顔をするかが見たくなんだ。見てみたくなはないか？自分を殺した男の畏怖する顔を…」

そう言うと、彼は目に狂気を滲ませて、可笑しそうにくすぐすと笑った。

相手の苦しむ様を見るなど、やる事は常軌を逸している。だがこれも人生の楽しみ方なのだろうか。

判らないといった顔をしていると、更に笑いが聞こえてくる。

「想いも人其々。全てを理解するほど難しいことはない。俺のこの“遊び”も俺だけが理解して、俺が愉しめればそれで良い」

そんな自分の人生を満喫しているような、後悔等していない堂々とした話し方だった。

彼は自分の為だけに不死の生を望み、生きている。

そんな生き方もあるのだと僕は初めて知った。

母さんの笑顔が見たいが為に…。

今までは狭い世界の中で、そんな生き方しか知らなかったから。

僕は無意識に自分の経緯を彼に話していた。

自分と同じ彼に会えた喜びと、ずっと打ち明けられなかった煮詰まった気持ちから、彼の前にきて溢れ出た。

彼は無言で言葉に耳を傾け、話し終えるとポツリと呟いた。

「“死の愛鳥”か」

その言葉の意味が解らず、首を傾げると彼はふつと笑った。

「死を司る悪魔の羽を持った片翼の天使。しかしお前は愛された。飼われている小鳥のように、大事に翼を広げられぬ狭い籠の中でな」

飼われるという言葉に僕は憤りを感じて、男を睨み上げた。その反応すら愉しむかのように、男はくつくつと笑う。気に入らずに顔を背けると、男はすまんと謝ってきた。

「少し苛ついて出た悪冗談だ。…俺はお前を羨ましく思う」

今男の口から継いでた言葉が信じられず、僕は顔を上げた。そこには先程までとは違う、優しい笑みがあつた。

「俺には家族の思い出が殆どない。生きていても危機を分散する為に、極力逢わずに暮らしていたからな。だから誰か一人に存在を認められて…愛されて育ったお前が俺は羨ましく思う」

そう言うと、彼は少しはにかんだ笑みを浮かべた。

経歴は自分と同じ。

しかし、信頼できる人が傍にいるかいないかの相違があつた。

僕がもし彼だったら、耐えられなかっただろう。

あの時もしも母に見捨てられたら、人生を投げ捨てていたかもしれないから。

僕は唯一自分を自分と認めてくれた、その男に視線を合わせた。初めて共感できる彼と出会えたことを感謝する。

自分を認めてくれる存在を探すという目的が果されたのだから。

自分の買い被りかもしれないが、彼も自分と同じように考えていたら良いと思う。

道に行くのに必要な、多大なる気力を彼から貰った。

何も言わずに見ている僕を不思議に思つた彼が首を傾げる。

何処か可愛く見えるその仕草に苦笑し、僕は頭を下げた。

「お話有難う御座いました。貴方に出会えたこと感謝します。おか

げで、自分の居場所を探す気力が再度湧きました」

「居場所？」

「はい。母との最後の約束なんです。異質な僕を受け入れてくれる居場所を見つけて。と……すみません」

彼が親と接触が少なかったのを思い出し、僕はすぐさま謝った。

親の話は自慢されているみたいで嫌だろうと思ったから。

だが意に反し、彼は噴出して笑い出した。

ぽかんと呆気にとられていると、彼は必死に笑いを堪えた。

「くつくつ……！謝ることはない。気にしてないからな。それに俺の一族は、まだ何処ぞで生きているだろうから、お前と気持ちの痛み分けといったところか……」

未だに笑いを堪えながら彼はそう言い放った。

一度ツボを突くと中々立ち直れない人らしい。

僕は漸く納まつてきた彼を見ながら、苦笑を漏らした。

そういえば、久々に本当の意味で笑ったかもしれない。

人の気持ちをも動かせる彼を、やはり凄いの思いつつ、僕は彼に笑みを浮かべて向き直った。

「それでは僕はこれで……。久々に話せて楽しかったです」

失礼と言って振り返り、翼を再び広げる準備をする。

此処からであれば飛び立てるだろう。

「おい、ちょっと待て」

彼から声が掛かり、僕は振り返った。

門に寄り掛かって腕を組み、僕を見て企むような笑みを向けた。

「居場所を探しているんだろう？ 此処はいつでも空いてるからな」

「…え？」

一瞬意味を掴みあぐねて、僕は彼に聞き返す。

“いつでも空いている”。それは…。

「無理にとは言わん。ただ場所がないなら、此処へ何時でも帰って来い。部屋は腐るほどあるし、住んでいるのは俺と館の管理者だけだからな」

俺と言う時に親指で自分を示して、彼はニツと笑った。

僕は驚きで目を見開いた。

そんな言葉を、夢にも思っていなかったから。

彼は背を門から離し、マントを正すべく翻した。

「俺の名は、ルウア・フェネリット。異名は“赤眼の悪魔”だ。何かあれば尋ねて来い。住むにしろ、住まないにしろ援助はしてやる」

それだけ言うと、ルウアは身をも翻し、門を開けた。

僕はその背を見て、拳を握り締めた。

こんな嬉しい申し出に、迷うことなどない。

「…フェリスです！」

中へと入ろうとするルウアの背に向かって僕は声を出した。

ルウアは足を止め、振り返った。

「僕の名前は、フェリス・ハーヴェリー・デイヴァイン。その意を天使の古代オルフェニス語で“聖なる心の道標”と言っんです」

まだそう離れていないので、先程までと同じ音量で言った。
何年かぶりに唱えた、たった一つの自分の名を…。

それを聞いたルウアは薄く笑った。

「フェリス…か。良い名だ」

そう言った後、ルウアは何かを待つように僕と目を合わせた。
全てを見通している笑みを浮かべて。

そんな彼に向かって、僕は決意して後一步の言葉を踏み出した。

「貴方が宜しいと言うのなら、此处を僕の居場所にさせて下さいっ」

その言に、ルウアは直さま微笑し、歓迎する。と短く告げた。
僕は宜しく願います。と述べ、喜びと嬉しさで笑みを浮かべた。
あの時母が見せたような暖かい笑顔を…。

そんな僕を見てルウアは優しく微笑むと、また屋敷へと歩き出した。

「居場所が決まったのなら、早く母親の墓前に報告して来い。きつと楽しみに待っているぞ？フェリスから報告がくるのを…」

此方を見ずに、ルウアは手をひらひらとさせる。

その言葉に、これからするべき事を思い起こし、翼を広げた。

「すみません！それでは行って参ります！」

僕は慌てて空へと飛び立った。

三年も経ってしまったが、母にこの嬉しさを報告するために、スピードを出して飛んだ為に、ルウアが「帰ってきたらお帰りというべきか？」と呟いた事は解らなかった。

三年ぶりに母の墓前で手を合わせる。

今まで見てきたものを僕は全て話した。

最後に祈りを上げて、僕は母に笑いかけた。

「彼に会えたのも母さんの御蔭だ。本当に有難う…」

この母が居なければ、居場所を探すことも、生を全うすることも、こんな風に笑うこともなかっただろうから。

僕はそれだけ告げると踵を返して、屋敷を目指して飛び立った。

彼のいる『屍の館』へ。

初めてお互い認め合える人に巡り合い、

あの場がやっと見つけた僕の居場所。

これからは心の底から、本心で笑って生きていこう。

“悪魔”と呼ばれる彼と共に。

“死の愛鳥”という名を背負って。

ずっと…ずっと…。

僕に愛をくれた貴女の間も

この生が真実尽きるその日まで…。

これからの未来は貴女の為にだけではなく

自分の為に…。

フェリス。

それは『聖なる心の道標』

自分の行く道をただ信じて
。

<END>

FILE 9：聖なる心の道標（後書き）

はい！これにて『死の愛鳥』は完結となります！
拙い文面ではありましたが、読んで下さった皆様、有難う御座いました！

堕天使フェリスの家族愛と生き様を書いたつもり…。

無理矢理つめこんだので、私自身なんだかなあとは思いますが。

何はともあれ、読んで下さった方々には感謝致します。
最終話までお付き合い下さり、有難う御座いました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9812f/>

幻獣の館 ～死の愛鳥～

2010年10月9日03時00分発行